
actor

くじら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a c t o r

【Nコード】

N9094C

【作者名】

くじら

【あらすじ】

キッドの予告状が記した月夜。必殺アイテムを手にコナンは哀を連れて飛び出していた。

1. 約束の夜

「あつ蘭姉ちゃん?! ぼくだけど博士の家に泊まるからね。

うん、大丈夫。・・・博士に迷惑掛けないよ。おやすみなさい。」

コナンは電話を切ると自然に笑みがこぼれた。

「待ってろよキッド。」

一昨日工藤邸のポストにラブレターが届いていた。

白き気障なドロボウからのデートのお誘い。

待ち合わせの場所も時間も解読済み。

逢いに行かなくちゃ、

今夜は君を帰さない。

檻の中まで連れてってやる。

「じゃあ博士、行って来るぜ。」

「新一、気を付けるんじゃぞ。」

「ああ。」

コナンはウィンクして自信家の顔を見せる。

博士は心配しながらも無言の声援を送った。

「工藤くん、出来たわよ。」

玄関まで行くと後ろから走ってきた哀が声を掛けた。

「例の薬が間に合ったのか。」

「二種類とも何とかね。でも責任は持てないわよ。こんなものでキッドを捕まえられるのかしら。」

「まあ、あいつも閃光弾とかいろんな物を持っているから。こっちも秘密兵器くらい持っていたっていいだろう。」

コナンは受け取ると玄関のドアを開ける。

「ちよっと待ってよ。わたしも行くわ。薬の効果も見たいしね。」

「早くしろよ。」

「待ってよっ。」

2人はキッドの予告した場所に急いで走り出した。

今回の獲物は米花町に在る富沢財閥記念館に展示されているビックジュエル。

もちろん中森警部の指揮の元で万全の警備をしていた。

「婚約者の叔父と言うのが警備にクレーム付けてきてるだど。

もう予告した時間になるんだっそんなヤツはさっさと追い払え!!
・・・全く警察の邪魔ばかりしやがって。キッドはオレがこの手でっ。」

「あの、鈴木次郎吉と言うそうです・・・リベンジだとか・・・」
「・・・あジジイか。変な機械まで設置しやがって・・・いいから追い返せ。」

おい、追い返す前にホッペタをギュ〜とするのを忘れるなよ!」

彼は対応した刑事に念を押すことを忘れない。

キッドの対する執念は誰にも負けない。

部下でさえ声を掛けるのに躊躇する後姿。

そのオーラは誰も寄せ付けさせないでいた。

「そう焦るな。」

気が付くと松本局長が立っていた。

「なぜここに?まさか・・・」

中森の手は局長の頬に伸びていた。

「おいおい。・・・ふっ、ワシを疑うんだから君も焦ってはおらんようだな。」

ワシの家はこのすぐ近くだ。

近所でキッドに好き勝手にされたんじゃ立場がないんでな。

警察の威信をかけて頼んだぞ。」

局長のお住まいはここからも見える高層マンション。

「ワシの存在が指揮系統に支障を来したらいかんだろう。」

吉報を待ってるよ。」

局長は肩を叩くと去って行く。

警部は敬礼をした。ギュくってやるのを忘れて。

1. 約束の夜（後書き）

くじらです。

CNRの頃にあった「入れ替わり企画」で考えたお話です。

未だ連載に躊躇しててパソの隅に寝ていたものを起こしてきました。

2. 煙と共に

夜空には黒い鉄の鳥が唸りを上げ、地上を走り回る白黒の虎が紅い眼を光らせ雄叫びを上げる。

白煙が晴れたときには彼らを守る宝は白きマジシャンにお招きを受けたと置手紙が残されていた。

行方を追って闇の中を無我夢中でさまよっているたくさんの足音。周りを取り囲むざわめきと共にその音は絶える事が無かった。

「これも違うか・・・。」

手にしたジュエルを月の光にカザして見ていた。

騒がしく鳴り渡るBGMを気にもせず高級マンションの屋上に落とした白い影は呟いた。

出かける前に今日の仕事にクレームを付けたストレートの髪の女性の言葉が気に掛かる。

『月明かりの下、白と黒が心を交わすために銀の世界に包まれる。

夢覚めのときを紅が鳴く』

一体何が言いたいんだ。紅ってアイツ自身が来ているんじゃないだろうか？

予告状通りに仕事を終え、これからが今夜のメインイベント。

小さな足音が聞こえてきた。

「・・・そろそろ最後の幕が開く。」

ドアが開く音に男は視線を向けた。

「招待状をありがとう、気障などろぼうさん。」

現れた影は自信げな声で舞台上上がる。

「いえいえお越し頂いて光栄です。今回は直接捜査に関われないみたいでしたからね。」

「わざわざ待ち合わせの場所を作ってくれたって訳か。でもここじゃハングラライダーで散歩するにも高度が足りないんじゃないかねえのか。」

「気にするほどの事でもないでしょう。おや……今宵の名探偵は彼女を連れて……デートですか？」

メガネの少年の隣には月の光に映える緋色の髪。

「ああ、特等席でおまえの正体でも見せてやろうと思ってさ。」
キッドの口元が少し緩んだ。

「それはよくお出で下さいました。お久しぶりですねお嬢さん。」

また予告状を送りますから、次回公演は開場から楽しみにしててくださいね。」

彼は手を胸にあて哀に礼をした。

コナンは詰まらなさそうな顔をした。

「ほうつ焼もちですか？」

ワザとらしい緩んだ口元が言う。

「その気障な振る舞いがな。」

「ご高名な高校生探偵とあまり変わらないと思いますけどね。」

こいつはオレの正体を知っている手強い相手。

コナンはワクワクする気持ちを嬉しく感じていた。

「中森警部には連絡しておいたぜ。今晩中にけりをつけないか？」

「まあ焦らないでください。まずはジュエルをお返ししましょうか。目当てもモノじゃなかったのですね。」

コナンはジュエルを受け取るとが麻酔銃を向けた。

「タイミングよく例の装置のスイッチが切り替わったようですね。」
キッドは空に舞い上がる木の葉にニヤリと笑った。

今回用意されてたキッド捕獲の秘密兵器は、翼を広げたキッドが自由に飛べないように風圧で巻き込み地面に吸い付けて逃がさない大掛かりな作戦。

鈴木次郎吉が自ら考案した別名「キッドホイホイ」という機械。富沢財閥記念館に贈りつけられる前に細工されているなんて誰も思っていなかった。

センサーに反応したキッドの人形を床に吸い付けていた風が消えた。正常に回転したプロペラを停止させるとゆっくりと逆回転を始め空に吹き上げる風に変わる。

翼を広げ逃げるのに格好の上昇気流を生み出していた。

「あれはすぐには止められないんですよ。」

大騒ぎをしているであろう中森警部を思い浮かべながらの科白。警察の情報は彼に見抜かれている。

「やべえっ。」

コナンは急いでキッドに近づいて例の薬を使うことを考えた。

風向きからして背の低いコナンには影響が無いだろう。

しかしコナンの意外な動きに気が付くとキッド自らコナンを抱きかかえた。

「このまま空を飛びますか。」

麻醉銃で寝てしまったらどうなるでしょうね。」

「こいつ、離せ。」

コナンがもがいていると、例の薬は二種類とも落ちてしまった。

「何んだ？」

キッドは嗅いだことに無い香りに驚いた。

煙があがる。

「あら、めずらしい現象ね。」

哀は2人の姿を隠した白い煙が消えるのを楽しみに待っていた。気が付くと、咳が止まらない2人が現れた。

「名探偵、何を使っただんですか？」

コナンが言う。

「おまえを捕まえるのにな。」

キッドが言う。

2人が顔を見合わせて驚いた。

「何でコナンがいるんだ？」

「・・・オレは名探偵になっているじゃないか。」

2人は入れ替わっていた。

「こんなこともあるのね。・・・科学ってすごいわ。」

哀は感心して見ていた。

「第3班から連絡があった。キッド発見、直ちに急行せよ。」

キッドの胸のトランシーバーから警部の声が聞こえてきた。

「名探偵を捕まえに来るぜ。どうする？」

kidコナンの憎らしい笑み。

いくらコナンでも今はキッドの姿、こんな現象を説明なんてできない。

「その姿じゃね。」

哀が手を広げながら言う。

「逃げるしかないな。」

conanキッドは笑うしかない。

警官達が屋上のドアを開けた。

「警部さん。キッドはあそこだよ。」

kidコナンが指を差す。

「あのやろう！」

conanキッドは警官が近付かないうちに哀を抱きしめると、本家を真似てハングライダーを広げるとビルの端に向かって走り出した。

「何か落ちたわ？」

哀が気が付いたのが遅かった。

キッドの上着の袖から落ちた閃光弾がまぶしい光を放つ。

一瞬にして光の中に2人の姿が溶けていった。

「へり、聞こえるか。キッドが風を利用して飛行を開始した。

レーダーで確認しろ！・・・いないだと！！空にはいないのか？」

吹き上げる突風はへりの至近距離での飛行の邪魔をする。

中森警部の声はだんだんとトーンが落ちてくる。

「やられた・・・」

屋上にいた警官たちは眼の前にいた泥棒を取り逃がしたことに肩を落とした。

3. ダブルキャスト

逃げた。

うまくはないけど逃げた。

いきなりキッドになったコナンは空を舞った・・・いや落ちたとも言おう。

初めての空の散歩は哀を胸に抱いたまま急降下。

・・・慣れない姿でムチャしすぎ。

運良く上昇気流のおかげでケガも無く木の枝に引っかかり、警戒中のパトカーをやり過ごしていた。

「驚いたっ。急に光るから足元が見えなかったぜ。」

「あなたねっわたしと心中するつもりだったの。それになんでわたしまで逃げる必要があるのよ！」

哀はぶら下がっているキッドの引っ掛ったマントを外しながら言う。

「コナンでさえ博士に信用させるのに苦労したんだ。」

まして今度はキッドだぜ。おまえがいなきゃ説明できないだろう。

「だいたいあの薬はなんなんだ？」

「わたしだって説明できないわよ。一緒に使うなんて想定してないわ。」

「なら混ぜるな危険って書いてけよ。」

「試作品なんだからしょうがないじゃない。」

言い合いしてる場合じゃない。

このまま見つかったらキッドとして檻の中。とりあえずここから離れなくちゃ。

「どうする？」

哀は言いたいことを言ったあとは落ち着いた口調で話を話した。

「今夜は自分の家に隠れる・・・じゃねえよっ帰るとするか。」

「後で夜食くらい持って行って上げるわ。探偵キッドさん。」
熱烈なキッド親衛隊は見当たらない。

2人はこそそこそと闇に紛れながら木から下りた。

「くそっ情けねえ・・・キッドなら憎らしいくらいカッコつけるの
にっ・・・。」

「あなたはあなた。工藤新一でしょ・・・全く何考えてるのっ!」
哀はc o n a nキッドの背中を叩いた。

☆☆☆

「名探偵もなかなかやるもんだな。」

一瞬にしてキッドは警部たちの目を盗んだ。

k i dコナンは感心しながらも次は自分の番。

変装を得意としていても子供の演技なんてしたことないけど・・・
彼のことは調査済み。

「警部さん、これでしょ。」

まずは中森警部を見つけ可愛らしく声をかけた。

「でかしたぞ坊主。」

口では誉めている。しかし顔は作り笑顔。

子供の目から見れば不気味な表情。それにまじまじとドアップで見
るとは・・・

頭を撫でてた手はいつのまにか頬を引っ張っている。

もう片方の手で肩を抑えられたまま逃げられない。

先を越された悔しさか、もうそれがクセにでもなっているのだろう
か？

「キッドもまだ付近にいるかもしれん。へり部隊は捜査範囲を広げ
ろ。」

だれかこの坊主を探偵事務所まで送ってくれ。」

そばに居た部下にk i dコナンを探偵事務所に送らせるよう指示した。

見つけるのは得意だけど隠すのは・・・

しかしアイツはオレが認めたライバル。心配するだけ損かもしれない。

こんな事を考えるのは想定していなかった事態の所為か？

乗ることはないと思っていたパトカーの後ろ座席に座らされるとは・・・

急な事態に彼の周辺の人物のオサライを繰り返していた。

「どうしたんだい？急に不安そうな顔をして。」

「別に？」

下を向いただけの子供に大人は氣を使って声をかけてくる。やっかいな役かもしれない。

「ははっそうか。夜遅くに1人で来たから毛利探偵に怒られるとか考えてたんだろ。」

心配するな。おじさんが話してあげるから。

だけど今回だけだぞっ。」

「はぁーい。」

コナンらしく可愛く答えた。

「コナンくん。博士の家でゲームやるって泊まったんじゃないかったの。」

事務所に着くと連絡を受けて心配していた蘭が待っていた。

「あっ、機械の調子が悪くて中止になったんだ。それで・・・」

「もう、1人で危ないことしちゃだめよ。」

知らないところで無茶をして怪我でもしたら・・・

蘭はコナンを抱きしめた。

「そんなことばかりしているとアイツみたいになったちゃうよ。」

その表情は心配する青子と同じ。

坊主の演技のはずが・・・ドキドキが止まらない。

「ごめんなさい。」

それしか科白が出てこない。

「もう遅いからお風呂はいつてきなさい。」

「はゝい。」

許されたのだろうけど居たたまれなくて逃げるようにその場を離れた。

お風呂から出る頃に電話が鳴った。

「コナンくん、哀ちゃんから電話よ。」

蘭はコナンに受話器を渡す。

「もしもし。」

kidコナンは蘭が離れるのを見届けて受話器を耳元に近付けた。

「どろぼうさんったらお風呂でのんびりなんて優雅なものね。お陰でわたしまで巻き込まれたじゃない。」

「・・・これはさっきのお嬢さん・・・。」

一瞬間の気配がした。

「怪我はなかったか？」

急いで言い回しをかえた。

「もう遅いんだからね。哀ちゃんも寝る時間よ。」

「はゝい。」

やはり蘭がいた。今度はお母さんのような言い回しに可愛らしく返事をする。

「クスクス・・・子供の演技も美味しいのね。」

ありがとう、心配いらないわ。

それじゃ手短に用件を伝えるわ。

工藤くんからのメッセージだけど蘭さんに手を出したらあなたの正体を公開するって。

あなたの正体を見るのが悔しいけど帽子を脱いでモノクルを外さないと横にもなれないのよ。

捕まえるのは現場だけにしてやるって言ってるわ。

世紀のドロボウさん相手にお人よしな探偵でしょ。」

「じゃあ、安心しろって伝えてくれないか。

あの手の顔には弱いんでねって。

そうそう、お嬢さんは哀ちゃんって言うんだ。

ひさしぶりに小学校に行くんで明日はよろしくな。」

「・・・仕方ないわね。」

受話器を下ろした哀は後ろにいた筈の見当たらない conan キツ
ドを捜した。

「灰原、元の姿に戻っているぞ!？」

洗面台から声がする。

そして歯ブラシを咥えながらその顔を見せに来了。

「名探偵と怪盗が同じ顔をしているのね。薬がなくても良いのかし
ら?」

返事がない。

学校に行けそうな感じがしたのか conan キッドは鏡の前で奮闘
中。

どうしても髪形が決まらない。

髪の手を摘んでは引っ張っている。

鏡の向こうの顔に感じる違和感に落ちつかない。

「ばーろーもう一回あの葉を作ってくれ。コナンに戻るぞ。

この体はキッドのモノでオレんじゃねえし。」

「彼との勝負もつけないじゃね。」

「頼んだぜ。」

まったくこの手の顔は世話が焼ける。

でも悪い気はしない。

哀は声に出さず頷いた。

しかしこの姿で出歩たら見かけた蘭さんはどう思うんだろう?
それじゃなくても無類の推理オタク。

米花町で事件が起こりませんようにそれだけを祈っていた。

4. 偽りのコナン

やっと眠りについたと思ったら勢いよくカーテンがよく開けられた。いつのまにか朝を告げるスズメの声。

窓から差し込むまぶしい光が彼女の優しい笑顔を浮かび上がらせた。

「お父さんもコナンくんも早く顔を洗ってっ！」

元気な名探偵の彼女の声で始まる1日。

初めての子役の舞台の幕が上がった。

名探偵たちは急いで元の姿に戻る準備をしているはず。

しかし早替わりはタイミングが大事。

慌てず騒がす小学生生活を楽しんでみるとしよう。

k i dコナンはおっちゃんに続いて眠い目を擦りながら洗面所に向かった。

台所から漂ってくるお味噌汁のいい匂い。

突撃毛利家の朝ご飯。

テーブルには美味しそうな朝食が並んでいるんだろう。

探偵業は頭脳労働。頭の働きは朝ご飯をしっかり食べることから。

いやでも期待は膨らんでくる。

k i dコナンは急いで顔を拭くとテーブルの前に座った。

・・・期待は大きいほどに裏切られるとショックが大きい。

たぶん美味しそうに焼けたアジの開きがふてぶてしくテーブルを占拠する。

そのウラメシそうな目と合った瞬間眠気も一気に吹っ飛んだ。

「未来の名探偵さんは大盛りよ。」

こっちの気も知らない優しい顔からお茶碗を渡される。

・・・あのヤロウ・・・嫌がらせにリクエストしたんじゃないやねえだろ

うなっ！・・・

・・・いや・・・知られている訳がない・・・食うよ・・・食べばいいんだろ・・・しかし・・・

勝ち目のないニラメッコを諦めて箸を手にとると、急にテレビの画面がついた。

「漁港の旨いものづくしだよ。」

「今度行こうってナカナカ連れてってくれないんだから。ねえコナンくん。」

テレビのリモコンを持つおっちゃんに聞こえるように蘭が言う。

画面はカブト焼きのマグロの頭が運ばれてゆく。

「でもここに行くとは横溝警部と遇っちゃうんじゃない？」

kidコナンの小さな抵抗。

「お父さんとコナンくんが一緒なら安心よ。」

やっぱりこの笑顔は無敵。

kidコナンは視界を白いご飯で遮ると口いっぱい詰めた。

「おい・・・おまえ？・・・大丈夫か？」

おっちゃんが顔を覗き込む。

「ちゃんと噛まなきゃダメよ！」

ここでいきなり立ち上がったら俳優失格。

脂汗を額に浮かべながらも急いでお腹に流し込むとランドセルを背負った。

早くこのテーブルから離れたい。

「どうしたのコナンくん！まだ早いでしょ？わたしも一緒に出るからちょっと待ってて。」

蘭の食事が済むまで教科書と一緒に突っ込まれていた推理小説に目を向けた。

「まったくそんなに夢中に読むとはな？」

小五郎のおっちゃんも呆れ顔。

『探偵左門字シリーズ―招かれざる晚餐―』

なんで・・・左門字は一句詠んでいればいいのに魚釣りなんてしてるんだ！

見事な・・・鯛・・・桜色の撓りに歓声をあげた。

・・・そんなに詳しく書くんじゃない。

もう文字はまったく目に飛び込んでこない。

・・・なにやってるんだオレ・・・

蘭がテーブルを片付けるとちょうど登校時刻。

k i d コナンがランドセルと事務所を飛び出した。

1人になれない限り気が抜けない。

何しろ隣のこの顔は何度もこの坊主の正体を疑っているのだから。

そして昨日のキッドの話をする顔はいつも隣にいる顔と同じ。

「いつかコナンくんがキッドを捕まえるかもね。」

浮かんでくるのはいつもの青子との会話。

アイツにだって白馬にだって中森警部だって捕まるわけにはいかねえんだよ。

でも・・・青子はどうしているだろう・・・変な心配してないかな？だからこの手の顔は苦手だ・・・

話ながら歩くと視線の先には坊主の仲間の少年少女3人組。

「蘭姉ちゃん行ってきます。」

k i d コナンは駆け出した。

子供は大人よりも違和感に気が付いてしまうもの。

しかし何度もコナンの正体を疑う彼女よりは楽かもしれない。

気分を入れ替えてみんなと学校へ向かった。

「灰原だ。早いな？」

教室のドアを開けた元太が驚いたように言う。

「たまには早く起きることもあるのよ。」

哀は眠そうな目をしっかりと開いた。

今日は仕方がない。あの葉の調査も偽物コナンの監視もわたしにしかできない仕事。

「おはよう哀ちゃん。」

欠伸を隠す哀に歩美が言った。

「灰原さんおはようございます。」

「おはよう哀……灰原っ。」

危ない危ない……

そばかすの少年に睨まれ、可愛い少女の瞳に小さな嫉妬の炎が見えた。

必死に誤魔化す仕草は大阪の探偵のよう。

気を緩めすぎたと苦笑いしているとチャイムが鳴った。

「……救われた？」

試合開始から先取点を取ってタイムアップの笛が鳴るまで気が抜けない全員守備で耐えるいつかしら見たサッカーのよう。

耐え忍ぶ試合はまだ始まったばかりだが、緋色の髪隣の隣がコナンの席。

昨夜の電話をくれた正体を知る彼女が隣の席なら少しだけ気が楽になる。

それにしても初めての役処は禁止事項が多過ぎる。

ため息が漏れた。

「昨夜は眠れたかしら江戸川くん。」

わざとらしく聞いてくる隣の彼女。

「名探偵はあの部屋で寝てるのかい？ いびきが煩くて参ったぜ。」

口調は完璧か彼女の顔色をうかがう。

しかし彼女は怪盗と負けずの劣らずのポーカーフェイス。

昨日は知っている顔の知らない彼女に抱きしめられて眠れなかった

なんて知られるわけにはいかない。

「あの程度で参るようなタイプでもないでしょ。あなたも夜行性なんだし。睡眠不足なんていつものことでしょ。」

あの部屋で寝た事があるような挑発的な彼女の発言。

オレの心の揺れを探っているのだろうか？

名探偵の相棒は小学生バナレしていて侮れない。

教室のドアが開く。

キッドにとって10年ぶりの授業が始まる。

懐かしさにワクワクしながら、ひらがなばかりの教科書を取り出した。

しかし何の演技もせずにただ教科書の影で寝ている。

突然指されても答えられない問題はない安心感。

「まったく気楽なものね。」

哀は呟いた。

でもそれが教科書を立てて居眠りするよくあるコナンの姿。

さらに運がいいのか音楽の授業は無い。

怪盗だけに体育の跳び箱も楽々こなす。

ただ給食だけはいつもより楽しそうに食べていた。

しかしコナンの行動は平穏な小学校生活では違いが分からない。

下校時刻になっても怪しむ生徒はいなかった。

学校帰りは5人一緒。

3人の後ろを哀とkidコナンが並んで歩く。

意外と子供もイケルカモ。少なくともこの役なら・・・

「久しぶりに食べたきな粉パンは最高だったな。」

「・・・顔や声はともかく、話し方まで同じね。」

「そうか？・・・お褒めの言葉を授かり光栄です、お嬢さん。」

「ふふふ・・・もしかしたら探偵と怪盗って同じ人種なのね。」

哀は苦笑いするしかない。

「昨夜の薬が完成してるけど、彼は家にいるはずだからこのまま一緒に来て元の姿に戻らない。」

「そうだな・・・でも名探偵のキッドぶりも見えて見てえな。」

戻るだけじゃ面白くないだろう。ちよつと考えてこのバッチで連絡するから待ってろって言っておいてくれないか。」

「まったく面白いなんて・・・人を伝書鳩がわりに使うわね。こっちの身にもなってくれない?」

工藤くんにとっては蘭さんを人質に取られてるようなもの・・・面白いと挑発されれば彼はノルだろう。

いつものようなショーを考えているはず。

言葉の一つ一つに油断はできない。

話しながら歩いていると通りの向こうにセーラー服が見えた。

「昨日から帰ってないんだって?」

「あいつのことなんか心配してないから。」

「それじゃなぜここに?」

「・・・それは・・・あつ。」

1人がストレートの髪を残して走り出した。

「ここら辺では見かけない制服ですね。」

「だけど蘭おねえさんに似てない?」

「似てるよなあコナン。」

3人が振り返る。

「あれコナンくんがいない?」

振り返った歩美に哀は知らないと言手を広げた。

「どこへ行ったんだ?」

「きつとヌケガケですよ。」

「キッドは解決したから・・・やっぱり探偵事務所かな?」

「行きましようっ。」

3人は勝手な推理で走り出した。哀はただ見送った。

とりあえず学校でバレることはなかった。

これからもう一つの抱え事を心配する時間。

彼が大人しく博士の家で待ってくれたらいいけど・・・。

帰ろうとする哀は肩を叩かれた。

振り返えるとさっき見たストレートの髪のセーラー服がいた。

5. 緋色と紅色

「ねえあなた。」

哀は肩を掴まれた。

「あなたが彼等に魔法をかけたのね？」

彼女の眼が威圧する。

「魔法があるなんて信じるほど子供じゃないわ。」

その迫力に圧されながらも哀はしっかり彼女の目を見た。

しかし彼等と聞くこの女性は何か知っているのだろうか？

「確かに子供じゃないわね。」

わたしにはあなたの姿に違和感を感じるわ。」

彼女から組織の嫌な匂いはしない。

頼りにしていた感覚が使えない。

逃げられないとなれば相手の出方を探るしかない。

「あなたは誰？誘拐にしては大胆なやり方だけど。」

「あら、ごめんなさい。驚かすつもりじゃなし、隠している秘密を聞きだすつもりもない。」

だけど黙っているわけにもいかないこともあるわ。」

彼女は表情を変えずに言った。

「そうね。紅子と呼んでくれればいいわ。」

ただあなたが大きな苦しみを抱えているのが見えたから忠告したくて。」

なぜか見透かされているような、

高飛車とは言わないがそんな感じの口ぶり。

「それはそれなりにね。」

このまま噛み合わない会話を流しながら相手の本性を見極めるなんて至難の技。

人影のない今すぐに手を下さないのは、彼女が罠をはっているからだろうか？

「邪神ルシュファのお告げを聞いたわ。」

『月明かりの下、白と黒が交わるとき銀の世界に包まれる。夢覚めるとき紅が鳴く。』

2人を銀の世界に導いたのは貴方でしょう。」

銀は占星術や錬金術で月に例えられる。

月は人間を狂気に引き込むと言われる。

銀の世界とはわたしが作った狂喜な煙のことかもしれない。

それにしても邪神ルシュファのお告げを持ち出すなんて怪しすぎる。

「私達は違う舞台上に上がりながら、神は似たような役柄を用意した。あなたはどうするつもり？」

光の魔人と白き罪人は入れ替わって役を替えても、

貴方や私はその配役に何も変わりはない。

意味のないことだと分かっているのかしら？」

白き罪人が怪盗キッドならば光の魔人は工藤くんのことだろう。

彼女はキッドの正体を知っていることになる。

それに入れ替わったことまで分かっていると・・・どうする？

「何が言いたいのか分からないわ。」

舞台が選べなくても初めからわたしの配役には脚本はない。

安らぎの時間をくれる今を意味のないことにするつもりはないわ。」

運命は選べない。

だけでもう独りじゃない。

わたしの与えられた運命から逃げるなど彼は言った。

脚本を書くのはわたし自身。

彼がいたから新しいストーリーを書き始めている。

「お告げの白と黒。

それは正反対、表と裏、人の二面性。しかしその人に変わりはない。そう、彼は彼に変わりはないのよ。

わたしは彼を振り向かせたい。あなたも同じでしょ。だから・・・」その言葉は告白。

彼女はキッドをイトオシク思っている。

だからわたしに言わずにいらなかった・・・彼女の想いが真剣ならわたしも答えるしかない。

「違うわ。出会った彼の心にはすでに彼女がいた。」

そう彼女を想う彼がわたしを包んだ。

それは今でも変わらない。

「やっぱり出会ったのが遅かったってことね。紅が鳴くは私のことだったか。」

彼女は溜め息を溢した。

紅は末摘花のこと。源氏物語に出てくる零落した悲劇の皇女と噂された女性。

忘れられようとも光源氏の帰りをただ待つだけ。

彼女はいつも怪盗キッドを優しい眼差しで見ているのだろう。

本当の姿の彼の瞳に映る女性を知りながら。

わたしが見ている少年探偵の瞳に彼女が映っているように。

「さっきの魔法を信じないってことは撤回するわ。」

彼女を完全に否定できないわたし。

紅は緋色。

闇夜にひっそり泣くのがお似合い。

「ありがとう。手のヤケルいたずらっ子だけど早く戻してくれるかしら。」

心配している彼女のためにも。」

彼女の言葉に哀は頷いた。

向こうで誰かに声を掛ける女性の声がする。

彼女は哀を置いて急いで駆け出した。

「快斗っ！」

conanキッドはいきなり手を掴まれた。

「快斗？えっ・・・蘭？」

似ていても見間違える筈がない。彼女は似ている他人。

「学校までサボって何やってたの？」

どうやら彼女はこの顔の知り合いのよう。

このまま口裏を合わせればキッドの正体が詳しく分かってしまうだろう。

それはフェアじゃない。

「人違いですよ。」

「誤魔化してもダメ。そうやって青子のことからかってるんですよ。」

「

「そんなことない。僕はあなたと会うのは初めてです。あなたのほうが勘違いされてるんですよ。」

「まだそんな事言ってる！」

彼女はいきなり頬をつまみ引っぱ張った。

「うおぐお・・・ううう。」

conanキッドは唸るしかない。

おまえは中森警部かと突っ込みたくてもしゃべれない。

「まさか・・・記憶喪失でさまよっていたんじゃない・・・どこから落ちたの？変なもの食べなかった？」

彼女は頭や手や足に怪我がないか捜し始めた。

「本当に人違いよ。中森さん。」

後ろから追いかけてきた同じセーラー服が止めた。

「・・・すみません。快斗じゃない。」

何か違いを感じたのだろう。青子の手が止まった。

「紅子ちゃん、わたしまたおかしいことしちゃった。」

「大丈夫よ。黒羽くんは戻ってくるから。今、工藤くんの相棒に頼んで来たから。」

赤みの掛かったストレートの髪に吸いこまれそうな瞳の女性が言う。振り返ったその彼女の視線の先には哀が立っていた。

彼女はキッドの相棒？

「工藤くんって白馬くんと同じ高校生探偵の？」

「そうよ。後は彼に任せて待ちましよう。心配ないわよ。ではお騒がせしました。」

軽く頭を下げると憔悴した彼女を連れて帰って行った。

中森・・・白馬・・・キッドの周りで聞く名前が出揃った。

キッドも偽りの顔を被る理由を隠して何かを求めている。

それに憔悴した彼女が一瞬蘭と重なった。

このタイプの顔はそういう運命の人相かもしれない。

「家に居なさいって言うておいた筈よ。」

「悪い灰原。・・・その所為でキッドの裏側を見ちまったな。」

「人それぞれ運命という舞台があるわ。あなたもわたしも・・・キッドもそして・・・。」

「早くコナンに戻るぞ。そして・・・。」

「分かってるわ。」

Conanキッドと哀は2人が見えなくなるまで見送った。

6. 偽りのキッド

「お帰り。」

2人が戻ると博士はテレビを見ていた。

「昨夜のキッドの検証番組じゃよ。」

鈴木財閥の次郎吉さんは面白いものを作っていたんじゃない。でもこれじゃ宝の持ち腐れかのう。」

キッドに知られてしまつては秘密兵器とは呼べない。

準備万端だからこそ大胆に予告状を出せるというもの。

しかし計画は計画でしかない。

神出鬼没に変幻自在、

いざというときの瞬間の判断力と計画を正確に実行する能力が備わっているからこそあの怪盗キッドなのだ。

「あれは？」

哀の視線の先にはk i dコナン。

しっかりと蘭の手を握りカメラ目線。

キッド本人のクセにちゃっかりテレビ出演中。

まったくコナンを楽しんでいる。

「『激論！宵の口緊急会議』の収録があるそうじゃ。」

鈴木次郎吉さんや毛利くんも参加して、キッドの手口の解析や対策を議論するそうじゃが・・・

本人が紛れ込んでいるとなるとどんなもんかのう？」

博士は呆れ顔をした。

「キッドが居なくても荒れるぜ。」

元警察関係者に警備会社役員、学者先生とキッドに敗れた被害者と見たことがある顔がカメラの前を通りすぎて行く。

みんな一癖も二癖もある者ばかり。
conanキッドは余裕たっぷり笑顔を振り撒く司会者の姿に苦笑いを浮かべた。

彼が居なければconanキッドは入れ替わることはできない。

博士の家で夕食を済ませ、哀の入れたコーヒーマツタリと時間を過ごした。

テレビは相変わらずキッドばかり。

モニターを眺めている哀の隣でconanキッドも同じように視線を向ける。

しかし浮かんでくるのは、

蘭の隣で笑顔を浮かべた憎たらしいkidコナンの顔より蘭の笑顔。コナンの生活が当たり前なのか、一日会わないだけで気になってしょうがない。

PIPIPI...

突然探偵団バッチが鳴った。

「名探偵テレビ見たか？」

わざと変声器で作ったキッドの声。

「ある建物の一室にいる。」

収録だからテレビ局はもちろん、聞いたことのある名前が揃ってるぜ。

あの次郎吉さんに毛利探偵も一緒、もちろん彼女もな。

近くで中森警部が現場検証をしているらしい。

役者が揃ったこのシュチュエーションって面白くないか？

入れ替わりを賭けての一戦。

探偵キッドは此所に無事来れるかな？元の姿に戻ったらオレが此所

から逃げて見せるぜ。」

大胆なkidコナンからの挑戦。

「キッドならどんな挑戦も受けるんだろ。」

「楽しみに待ってるよ・・・あっうん・・・蘭ねーちゃんが呼んでるから。じゃあな。」

あのやろう・・・蘭にベツタリかよ・・・

挑戦を受けて、工藤邸に一旦戻ったconanキッドが帰って来た。

「いつでもいいようにと思って用意してたんだ。」

conanキッドは哀の目の前に抱っこ紐をだした。

「な、何考えてんのよ。」

「昔、母さんが使っていたやつを見つけたんだ。」

やっぱりキッドは飛んで現場に行かなきゃな。灰原もこれなら安心だろ。」

「安心ってね。飛行もままならなかったんじゃない？」

誰にも見られずに二人が揃ったとき薬を投げる大役。一緒に行くことは覚悟していたけど。

「大丈夫、もう馴れた。」

それにこの姿で蘭に逢うわけにいかない。」

キッドの顔が笑っている。

☆☆☆

予定の時間まであと1時間。

キッドは空を飛んだ。

胸の辺りにしがみ付いている哀がいる。

昨夜と違って快適さを感じる空のランデブー。

「もう少し南ね。・・・そろそろよ。」

「了解。高度下げるぞ。」

予備の追跡メガネをかけた哀のナビゲーションでハングライダーを操作する。

地上には唸りをあげる黒白の虎の群れ。

「ちょっとあれって。」

「さすが中森警部。キッドの捜査に燃えてるな。」

conanキッドは笑みを浮かべた。

ハングライダーを操っている彼が一戦を交える前に何を楽しんでいるのか分からない。

すると追跡メガネの中心に光が点滅した。

示された建物は新一としてもコナンとしても知らない場所。

「ここか？」

哀を降ろしたconanキッドは辺りを見回した。

地上には赤い光を廻したままのパトカーが停まっている。

降ろされた哀は操縦士の遣り遂げた満足げな顔を見た。

「その顔は何なの。」

今のあなたはキッドなのよ。

警察に見つかったら追われる身なのよ。」

「わーっているよ。もう中森警部に見付かったみたいだな。」

哀は1つ目のため息をついた。

「これからどうするの？」

「どうするって・・・アイツの出方を見るか？」

「何も考えてないの？」

パトカーが停まってるんでしょ？

警察がいる場所で彼と入れ替わるのよ。何か考えがあると思ってたわ。」

「面白そうだからすぐにノツタまで。今はキッドだからな。」

「・・・ばか。」

人の気も知らない大馬鹿者に哀は呟いた。

「でも中森警部にしちゃ早いな？」

「ちょっと静かにして・・・。」

気持ちが高揚しているconanキッドの口を塞いだ。

「どうした灰原？」

「・・・死んでるって・・・園子さんの声よ。迷探偵さんと蘭さんもいるみたい。」

顔を近づけたconanキッドに探偵団バッチを渡した。

「園子の叔父さんがいるんだ。園子も来てもおかしくないか。」
conanキッドは気にせず屋内に入っていく。

哀も付いて行く。

「パトカー・・・なるほど目暮警部と高木刑事の声がするわ。」

目暮警部とおっちゃんの捜査状況が聞こえてくる。

「殺人事件・・・彼が送信してるのね。」

事件となればkidコナンが近くにいるんだろう。

正確にオレの行動を模写してやがる。

「・・・あのやろう。実況放送してくれるなんて気が利いてるじゃねえか。」

哀が心配していた通りconanキッドの頭は事件捜査を始めてた。
哀は2つ目のため息をついた。

7. 華麗なる共演

「それじゃ第一発見者は？」

「園子くんです。」

「彼女か・・・。」

「はい、テレビの仕事を受けまして蘭とコナンを連れて伺ったところ・・・。」

「なるほど・・・。」

「遺体の死亡推定時刻は私たち出演者はあの控室で待たされていました。」

外に出た者はありません。テレビクルーはこのフロアに出入りを限定されてました。」

「各フロア並びにエレベータの防犯カメラに疑わしい人物は映っていなかった。」

「確かに犯行時刻から外に出た者はありません。」

「鈴木財閥のビルだけにセキュリティは万全ですな。」

「ふん、それは万全でもキッドに入られたってイヤミか？」

「そういう意味では決して・・・。」

「まあまあ、すると自殺の線が濃厚だな。」

「あれれ・・・高木刑事、これって変だよね。」

「またおまえかつ！現場は子供の遊び場じゃねえんだっ！」

「ちよっと待ってください毛利さん。コナンくんが言うとお持ちよつと変ですよ。」

「なるほど・・・殺人の線も捨てきれんな。だがそうすると容疑者

も絞られるが・・・」

「確かにそうですが・・・。」

事件の経過は実況放送から理解できた。

後は犯行現場を見ないことには始まらない

哀の制止も聞かず conan キッドは廊下の黄色と黒のテープを乗り越えた。

「犯行現場はここですか？」

「ちよつとつ、関係者以外は。ええっ！」

警備していた警官が声をあげた。

トメさんをはじめ数人の顔を知る鑑識さんが振り返る。

「バカ・・・。」

哀にはもう止められない。

「キッド!？」

「そのままそのまま・・・どうぞ作業を続けてください。何か分かりましたか？」

「い、いや・・・まだ・・・」

「なるほど、・・・何か出ましたら教えてください。」

あっけに取られるトメさんの前でキッドは扉を見たりちよこちよと部屋の様子を調べてまわる。

「確か少年探偵団のお嬢ちゃん。どうしてキッドと？」

キッドに声を掛けられなかったトメさんは哀に声をかけた。

「あのね・・・江戸川くんをテレビで見たら・・・これからそこに行くから一緒に行かないかって。」

「・・・何もされなかったか？」

鑑識の男が聞いた。

conan キッドは「ばーろー」と言いたい気持ちをグット堪えて

状況を把握することに専念。

「彼は紳士的なドロボウさん。心配は要らないわ。」

哀の表情は大人をも納得させた。

「トメさんっ、ここを調べといってもらえませんか。結果は高木刑事に連絡してください。」

手を顎の辺りにあてながら考えていたキッドが言った。

「えっ・・・ああ・・・わたしが入念に調べておこう。」

「お願いします。」

キッドは哀を従えて部屋を出て行った。

「なぜキッドがトメさんを知ってるんだ？」

突然現れ、帰って行った訪問者に鑑識の手が止まったまま。

「こらっ！しゃべってて証拠を見落とすなよ。」

あの怪盗直々のご指名となれば徹底的に調べてやろうじゃないか。何を考えてるのか楽しみだな。」

徹底的に現場は調べられた。

☆☆☆

「どうだ毛利くん。眠くならんか？」

「いやーうーん偶然かもしれません・・・自殺の線が強いですな。」

「しかし偶然と言い切れるものでもない。なにか方法があるのかもしれないな。」

容疑者が絞られてもなかなか決定的な証拠はない。

「コナンくんは何か分かった？」

「ううん。ちょっと難しいや。」

kidコナンは首を振る。

期待をしながらも蘭は少し安心した。

conanキッドは満を持して関係者が集められた部屋のドアを開けた。

「ちょっと待って下さい。自殺と決めるの早すぎるんじゃないですか？

犯行の手口はテーブルマジックのようなもの。

近くにいるほど視野が狭くなるというものですよ、目暮警部。」

「キキキキ、キッド!？」

招待されていないお客に部屋じゅうが驚いた。

キッドの手口を子供騙しと下らないと言い切っていた連中が息を飲む。

廊下の向こうのテレビ局関係者も騒だした。

「容疑者の取調べを中断するのは早計過ぎます。

わたしのことで討論番組をやるなんて面白い企画を楽しみに見に来たのに、

その場所で亡くなられた方がいらっしやるなんて残念でなりません。このような見るに耐えない犯行をそのままにしてはおけませんね。わたしが観客として楽しみにしていた舞台を血で汚した者にはそれを償う義務がある。」

キッドは容疑者たちに不敵な笑みを漏らした。

「捜査状況は聞かせていただきました。

さつき千葉刑事が防犯カメラを確認させてもらいましたが、不審人物はいなかったと報告していましたね。」

「そうだが・・・自殺と他殺の両面から捜査しているが？」

目暮警部は言った。

「そうですね。昨夜わたしがいつから変装して忍び込んでいたか初めから警察は解りましたか？」

「それが解っていれば中森くんも苦労はせんだろう。」

「カメラなど気にしなくても最初からいればいい。同じですよ。

設置されたカメラの場所を把握したとしても短時間に防犯カメラを

避けて逃げるのは至難のワザ。

犯人は堂々と我々の前にいるんです。」

「まだ自殺の線は消えておらんぞ。犯人は変装していたとでもいうのか？」

「遺体には不自然な部分があったのでしょ。」

「そうだが・・・。」

事件の状況を知りすぎているキッドに目暮は驚いた。

「どろぼうに言われたかねえ。おまえは事件を起こす側、事件を解決する側のオレたちに口を出すなってんだ。」

小五郎もイライラしていた。

「お気に召しませんかね？」

「その話し方が気にいらねえんだ。」

それは声も含んでいた。あの商売敵で娘を誑かすあの高校生探偵に似た鼻につく言い回し。

蘭の顔は曇っていた。

「どうしたの蘭姉ちゃん？」

kidコナンが手を引く。

「ううん、なんでもない。」

「それじゃこんな声がいいですかね。」

蘭の顔を見たキッドの声は小五郎の声に変わった。
得意げに口元が緩んでる。

「人の声を使うなっ！」

小五郎が怒鳴った。

「なんでもいいから続けてくれ。」

目暮は小五郎を宥めた。

「変装する必要はない。犯人は初めから現場にいたのですよ。」
「なんだと！」

「簡単なことです。クロークと姿見を使ったトリックです。

遺体を発見した毛利探偵ならすぐに遺体を確認するでしょう。しかし普通女性なら悲鳴を上げて遺体に近付かない。」

「誰が来るか分からないだろう?」

「いいえ、犯人は女性が来るように仕向けた。」

「・・・そうか。」

目暮は納得した。

「犯人はあなたですね。」

キッドは容疑者の1人を指差した。

「わしだと言うのか! そんなでっちは許せん。

犯人は神出奇没、この場所に堂々と潜り込んだキッド本人じゃないのか?」

その場にいた一人が言った。

「わたしのアリバイなら中森警部に聞いてください。

警部ならわたしを追いかけてそろそろやってきますよ。」

p i p i p i p i

「はい高木です。・・・トメさん? はい・・・はい・・・えっそうなんですか。」

・・・わかりました。」

「何か分かったか?」

「いえ・・・キッドに調査を頼まれたようです。」

高木は言った。

キッドは高木から報告を聞いた。

「なるほど・・・そこまで・・・では向こうの部屋でトリックを再現して差し上げましょう。」

・・・ではコナンくんちよっと手伝ってくれないか。」

「ええ。」

k i d コナンはワザとらしく嫌がる。

コナンを演じてるクセにアドリブを入れたがる嫌なヤツ。

「キッド。おまえはなぜここにいるんだ？」

遅れて来た中森警部がテレビクルーをかき分け部屋に入ってきた。

「すまんが中森くん。キッドが事件のトリックを説明してくれるんだ。少し時間をくれないか？」

周りの刑事たちが中森警部に視線を向ける。

「・・・いいだろう。しかし部屋を警官に囲ませるがいいな。」

「構いませんよ。それでは始めましょうか。」

検証を始めると部屋からコナンの姿が消えた。

「こうすると姿を隠す事が出来る。」

クロークに姿見を入れただけのトリック。

「それなら誰でも出来るじゃないかっ！」

犯人にされた男が叫んだ。

「確かに何方でも可能です。ここにいる数人の方の指紋も検出されたようですしね。」

しかし残念ながら意外な場所に証拠が残るんですよ。

高木刑事が受けた報告を発表してくれませんか。」

高木はトメさんから聞いた証拠を説明した。

「マジックは人を殺す手段ではありません。」

その場に崩れ落ちた犯人は高木刑事に引かれ連れていかれていった。

「すみません目暮警部。勝手な真似を。」

「中森くんも迎えに来ておるし事情聴取に付き合わないか。」

警部は笑いながら言う。

「わたしも付き合うぞ。」

引き攣った笑いを浮かべた中森警部が1歩1歩近付いている。

「遠慮しておきます。」

哀の合図に消えたはずのコナンが閃光弾をばら撒いた。
2人はキッドの手を引くと屋上に逃げた。

「2人とも葉を投げるから大人しくしててちょうだい。」

煙が消えてもコナンとキッドの姿。

見た目では成功したのか分からない。

お互いがその体を確認して安堵の表情を浮かべた。

「キッド、体を貸してもらったぜ。」

「名探偵、これじゃ本家ルパンだな。」

「怪盗キッドの名前に箔がついただろ。焦らした割には呼び出しは意外と早かったな。」

「野暮ヨウが出来たのでね。でも楽しませてもらったよ。」

キッドが何かのスイッチを押すとすると昨夜の博物館を囲むビルから花火があがる。

「なんだ？」

「きのうは予定が狂ったのでね。後夜祭ってとこかな。」

いや、久々の小学生は楽しかった。あのキナコ揚げパンがまだあるなんて思わなかったぜ。

今度はお嬢さんともデートしたいな。」

「こっちは楽しくなんかねえよ。・・・ともって何だ？おまえまさか蘭とっ。」

「また会おうぜ。」

キッドは警察のヘリの待つ空に舞っていった。

「帰ったわね。でもキッドはまた誘ってくるわ。」

「運命だからな、オレが捕まえるんだから。」

「それよりわたしもだいぶ振り回されたんだけど。空の散歩だとか、キッドの姿で探偵をやるなんて。」

「元と言えばおまえの作ったあの。」

「つくってくれと言ったのはあ・な・たよ。」

そうね。今度は雑誌の特集で載っていたお店のケーキがいいわ。早めに行かないと行列ができるそうよ。」

哀はニコニコして話す。

「おいおい。」

☆☆☆

しばらくして警察からなんとか逃げたキッドは傷だらけになりながら着地した。

「あいつハングラライダーの翼の角度を変えていたな。あいつはオレを殺す気か？」

でもその顔は楽しそうな笑みを浮かべた。

「これがあの怪盗キッドなのかしらね。」

木の上から声がする。

「紅子？」

彼女はすべて分かっているような顔つき。面倒くさい言い訳は必要ない。

「早く帰ってあげたら。工藤という探偵にできないことをあなたは出来るのだから。」

「ああ、そのつもりさ。」

毛利探偵がテレビ出演を受けた途端、メールを打っていた名探偵の彼女。

ポケットのケータイが震えだしたのを誤魔化しながらも浮かんでくるのは青子の顔。

自分のケータイは家に置いてきた。

きっと着信不在とたくさんのメールが届いているだろう。

それにあの顔を見ないと、あのウルサイ声を聞かねえと調子がでない。

「彼女は待ちくたびれてちよつと暴走気味だけど……わたしが手を貸してあげないこともないわよ。」

紅子は笑いながら言った。

キッドは苦笑いを浮かべるしかなかった。

8. 次回公演まで

青子が悩んでいた。

ある有名なケーキ屋さんに快斗を呼び出していた。

「なんでキッドが事件を解決けるするのよ。」

テーブルに置かれた氷の浮かんだコップの水がカランカランと音を立てて波を打つ。

「なぜ・・・最低男ダントツ街道まっしぐらなのに・・・警察に協力して殺人事件を解決してんのよ。」

今度はテーブルに当たり散らした元凶である快斗の広げた新聞を引き裂いた。

心配をかけたからってなぜコイツにケーキを食べさせなくちゃならねえんだ。

紅子も青子を調子付かせるなんて。

・・・それにしても2人は異様に気があってたな・・・

ぶつぶつ言いながらも快斗は破かれ散らかった紙片を集めた。

「キッドにも気まぐれってあるもんなんだよ。」

「気まぐれって、キッドって何を考えているのっ!」

青子の怒りはボルテージアップ。

キッドの所業が理解できない。

「キッドのこと少しは見直したんじゃないか？」

「い・い・えっ! 協力するなら、なぜおとうさんに捕まってくれないのよ!」

この話は簡単に終わりそうもない。

「簡単に捕まるわけねえだろ。ワンツトウツスリー。」

快斗は自慢気に破かれた新聞を開いた。

「わあっ！」

あまりの見事さにケーキセットを運んできたウェイトレスが驚いた。

「すみません。バ快斗っ！」

青子は快斗の頭をテーブルに押し当てながら謝る。

「・・・でもウェイトレスさんはキッドが捕まる思います？」

押し当てられても快斗は負けない。

直ぐさま同意を求めた。

「えっああ・・・そうですね。」

わたしは捕まって欲しくないな。

事件まで解決しちゃうなんて、もっとキッドのファンになっちゃいましたよ。」

笑いながら2人の前にケーキセットを置いた。

「全く・・・キッドなんてっ・・・。」

青子是不機嫌そうにパクパクとケーキを口に運ぶ。

「そんな顔して食べて美味しいか？」

「これはヤケ食いの分。」

「はっ？」

コーヒークップを持つ快斗の手が止まった。

「・・・そして・・・ごちそうさまうっかり味わって頂くわ。」

青子の手は快斗の前のケーキに手が伸びていた。

それは哀がりクエストしたケーキ屋さんから聞こえてくる賑やかな声。

みんなのケーキを注文を済ませたコナンが喫茶部を覗くと昨日まで鏡で見た顔が笑ってる。

「あいつ・・・いい顔してるじゃねえか。」

まるで服部と和葉さんを見ているよう。
おもわず口元のが緩んでくる。

「久し振り少年探偵。」

コナンはいきなり頭を撫でられた。

「白馬の兄ちゃん？」

「君もこのケーキがお目当てかい？」

大分並ぶけどそれだけ美味しいらしいよ。うちのばーやが好きでね。

」

探は話しながらコナンの視線の先を見た。

「彼を知っているのかい？」

「・・・別に。」

「そうか・・・彼は僕の最大のライバルさ。」

探はコナンにウィンクした。

白馬もキッドの正体を知っている。

ライバルとの勝負は月明かりの下で。

コナンも笑顔で頷いた。

☆☆☆

米花町もおやつの時間。

博士の家に少年探偵団が集まっていた。

紅茶をテーブルの置いた哀は、キッチンに戻りコーヒーを淹れている。

「キッドが事件を解決しちゃうなんてね。」

歩美がフォークを持ちながら。

「平成のルパンですからね。本家のルパンも事件を解決しているんですよ。」

光彦が口の回りを拭きながら。

「すごい。ルパンもドロボウだけじゃないんだね。」

「ドロボウといやあゝこのケーキ砂糖ケチってないか？誰かに盗まれたんじゃないか？」

元太は空になった皿に指を差す。

「甘さを控えた大人の味ですよ。」

歩美も元太も光彦もケーキを食べながら言いたい放題。

博士も嬉しそうにケーキを口に運んでいる。

誰が早起きして並んで手に入れたとは知らず早々とお腹に納められていた。

「コーヒー入ったわよ。」

コーヒーをテーブルに置いた哀はコナンの隣に座った。

「サンキュ。」

「みんな美味しそうに食べてくれて良かったじゃない。」

「まあな。」

「なにか不満でも？」

「光彦たちに言われたんだけどアイツが蘭に甘えてたってホントか？」

「抜けがけしたハライセよ。」

・・・わたしたちの前では彼は約束を守ったわ。

みんなの前ではいつもの小学生の江戸川コナン。

彼は見事に演じきったわね。」

「今度逢うときは・・・。」

偶然がくれた不思議な時間。

それは更に対決を楽しみにしてくれた。

「冷蔵庫にある包みはケーキでしょ。小嶋くんや博士に見つかる前に彼女に届けたら？」

不意に哀が言う。

「えっ・・・ああ。」

「出来れば空が紅に染まる前にね。」

哀は窓を見ながら言った。

「紅って何だ？」

コナンは首を傾げる。

「あなたや白い怪盗さんは知らなくていいこともあるのよ。」
哀は呟くとキッチンに向かった。

f i n

8. 次回公演まで（後書き）

最後まで読んでいただきましてありがとうございました。
期間中に企画に参加できなかったのですが、こうして最終話を迎えることが出来ました。

やんちゃな探偵と怪盗、それを心配して見ている2人。
彼らにはどう映っているのでしょうか？
くじらはそれが一番気になります。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9094c/>

actor

2010年10月11日04時37分発行